

[44] ワシリエフ新演出『白鳥の湖』

～バレエにおける国際性と地域性～

1997年10月17日 東京新聞 夕刊

古典バレエで最も知名度の高い『白鳥の湖』に、
またもう一つ、過激な改訂版が出た。しかも今度
は、作品の祖国ロシアのバレエ団によるものだ。

新版『白鳥の湖』を演出振付したのは、かつて
ポリシヨイ・バレエのスターとして世界にその名
を轟かせたウラジーミル・ワシリエフ。先年の
ポリシヨイ劇場大改革の際に、劇場全体の総監督
に就任して話題になった人だが、バレエの演出振
付では、この新『白鳥の湖』が初仕事である。

改訂の最大のポイントはストーリーにある。従
来の『白鳥の湖』はご存じだろう。母一人子一人
の王子が、成人の宴で后を選ぶはずの前夜、悪魔
によって白鳥に変えられた姫君オデットに逢い、
恋に落ちる。彼女を悪魔の呪いから解くためには、
ひたすらな愛を貫くのが条件であったのに、彼は
翌日、悪魔とともに現れたオデイルをオデット
と取り違えて、愛を誓ってしまう。

ところが今回の版では父王が生きていて、それ
が実は悪魔だという設定。父が隠していた女と出
会い（ツルゲーネフの『初恋』みたいだが、父と
彼女がどういう関係なのか、舞台からは明らかで
ない）彼女を愛した王子は、父と悪魔と闘って彼女
を自分のものにしなくてはならない。第三幕の宴
の場面で登場するのは本物のオデットで、彼女に

[44] ワシリエフ新演出『白鳥の湖』

～バレエにおける国際性と地域性～

1997年10月17日 東京新聞 夕刊

愛を誓った結果が、父との対決というカクストロフを招く。従来の版では、白鳥姫と黒鳥姫を同じバレリーナが二役で演じて、その表現の違いが見所になるのだが、黒鳥がいないのはちょっとした不足りない気もしなくはない。

しかし、私がこのストーリーをなるほど思ったのは、父が悪魔だという発想に意外に説得性があるように思ったからだ。悪魔を人生にのしかかる圧力と解釈すれば、自立しようとする息子が父という圧力に正面から立ち向かうのも、ありえない話ではない。

ロラン・バルトが『ラシーヌ』で展開しているのも、これと通じるところのある分析である。バルトによれば、ラシーヌの悲劇はどれも同じ基本構造を持っていて、すべての財宝と女を独占している権力者に対抗して、次の権力者たらんとする者が挑戦するという図式だという。

* * *

もっとも物語のコンセプトには同感できても、バレエとしては疑問の部分がないわけではない。たとえば、悪魔である父親が何とも軽やかな跳躍を見せ、王子をも凌ぐほどの存在感を示すのは、やはり悪役である以上、ちよつと具合が悪いのではないだろうか。

[44] ワシリエフ新演出『白鳥の湖』

～バレエにおける国際性と地域性～

1997年10月17日 東京新聞 夕刊

もともとポリシヨイのグリゴロヴィッチ版『白鳥の湖』では悪魔ロットバルトが華々しく踊るのだが、今回私が見た悪魔が若手のテクニシャンだったせいもあって、王子の影がいささか薄かった。また白鳥／黒鳥の二役にしても、最近黒鳥のほうが拍手が多い傾向にあるから、主役のバレリーナにしてみれば、見せ場が減った感じだろう。

ワシリエフ版『白鳥の湖』のもう一つの特徴は、ロシア的色彩を濃くしたことである。このチャイコフスキーの名曲はとりわけロシア的な音楽であるのに、従来バレエではそれが十分に生かされていない、とワシリエフは主張する。なるほど、第一幕も第三幕も、主調は民族調の華やかな衣装や体の動きで、観客を独特のエキゾチックな雰囲気誘い込む。今までとほとんど変わらない第二幕に、むしろ違和感を覚えるほどだ。

振付そのものはいかがかと言えば、さすが自らあらゆるボキャブラリーを体得した元スターだけあって、一つ一つのステップは精妙だし、フレーズの流れも実にいい。曲想も、これまでこのバレエで感じたことがないほど細かいメリハリが彫り込まれていて、『白鳥の湖』というのはこういう音楽だったかと、初めて聴くような思いにさせられる箇所も少なくない。

[44] ワシリエフ新演出『白鳥の湖』

～バレエにおける国際性と地域性～

1997年10月17日 東京新聞 夕刊

だがこの新版、ロシアではかなりの批判を浴びたらしい。その理由の一つは、国宝的な古典芸術にあまりに大きな改変を施したこと。そして多分、ロシア的な民族色を売り物にしていると見て、それに反発する向きもあったのだろう。

バレエというのはおもしろい芸術で、古来、先進文化への憧れを原動力として世界中に広まったのだが、それでいて、あるいはだからこそ、ローカル・カラーもまた欠くべからざる要素だった。そうした国際性と地域性の絶妙な配合の具合が、実のところバレエの舞台の見所なのだが、それが本国では素直に受け入れてもらえないことがある。日本でも、日本をテーマにしたバレエは必ずと言っていいほど不評である。

だが、こうした名作の改訂版にとって最大の障害は、古典のイメージがあまりに定着してしまつて、ファンも批評家も、新しい解釈に心を開くことができなくなっているということではないか。見慣れた舞台の出来不出来をあげつらっているほうが楽だし、心安らかなのだ。新しい創造の受難は世の常だと、いつそ達観すべきなのかもしれない。

* * *